
使い魔さま ご主人さま

キャシィ塚本

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い魔さま ご主人さま

【Nコード】

N3984T

【作者名】

キャシー塚本

【あらすじ】

神鳴流継承者として修行を続ける女子高生、青山素子。そんな彼女が、突如現れた光に吸い込まれてしまった先は、見知らぬ世界だった。

第一話 美少女主従、相まみえる

目はきよとんとして丸く、口を半開きにしたキュルケの口から言葉が漏れた。

「貴女、誰？」

どこまでも続くかのような辺り一面の草っ原、彼女達とまばらな小動物以外は風が揺れるだけのその場所で、呆けたように突っ立つ褐色長身の少女。

その眼前に横たわるは、この空間で一際映える白と黒。

新雪のように白い肌は陽光を幾らか反射するほどであり、その頭には腰まである長くて一糸の乱れもない髪。

そこだけ夜になっていているかのような濃い黒は、これまた日の光を得てきらきらと反射を返す。

さらさらと春風に梳かれるそれは、一時として同じ様では有り得なかった。さながら太陽と風に踊る水面のように。

長くほっそりとした五指には白木拵えの木刀をしっかりと握り、背中には袈裟掛けにした袋を胸の辺りで縛り付けてある様子。腰からは白く、下は赤い服を着たその少女は、ううんと呻きながら、ゆっくりと瞼を開けた。

「じじは……どこだ？」

最初に目に入った赤髪褐色肌の美女に問うでもなく一人ごちたのだが、ぱつと上体から足腰まで一気に起き上がった少女は、左手に木刀を握り締めたまま眼前と周囲に気を張った。見たことのない風景、そして人だ。

「ここはトリステイン魔法学院の近く。貴女は？」

動揺を必死で押さえ込みながら、キュルケは平静を装う。

使い魔召喚の儀式で人間が呼び出されたなんて、聞いたことがない。今日から、あの落ちこぼれの“ゼロのルイズ”同様の笑い物になるのだろうか。学院の生徒中でも一、二の魔法エリートにして随一のモテ女、この“微熱のキュルケ”ともあろうものが。

近未来のことを思うと、実際のところ目眩がしそうなのだが、気丈にもキュルケは踏ん張った。

セオリーが通用しないとすると、眼前の少女は、使い魔どころか自分に牙を剥く危険な存在かも知れない。その危機感が、彼女の精神をどうにか強く保たせた。

「私は青山素子。日本は京都の出身で、今は神奈川在住の高校生だ。ここは、ひよっとして欧州か？」

さっぱり分からない。この娘は一体どこからやって来たのか。

キュルケのデータベースに存在しない単語ばかりである。もとい、彼女の服装・容姿の何もかもが、キュルケの知識内に存在しない。

これはたちの悪い夢ではないか、とキュルケは現実逃避して楽になりたい誘惑に駆られたが、前述の危機感がまだ辛うじて彼女を踏み止まらせた。現実には立ち向かえと言わんばかりに。

「残念だけど、貴女の言った地名は、この世界には無いと思うわ。遥か東方のロバ・アル・カリイエになら、あるのかも知れないけど。貴女、ロバ・アル・カリイエは知ってる？」

「聞いたこともない」

細い首が一往復して揺れると、ピロードの滑らかさで髪が絡み付くかのよう。癖っ毛のキュルケは、素直にそれを美しいと思った。

「そう」

アンニュイな気分であーっと溜息を付く様は、年齢不相応な色気を放つ彼女には良く似合う。だから、今遭ったばかりの素子が、眼前の相手を自分より年上なのだろうと憶測するのも無理はなかった。

「互いに話がさっぱり噛み合わないみたいけど、貴女が遙か辺境から来たものと仮定して話すわ。まず、貴女は恐らく私に召喚されたと思うの。使い魔として」

状況を理解させるのが最優先と判断したキュルケは、彼女にとっては馬鹿らしいくらい丁寧はこの世界、ハルケギニアのことを話し始めた。

一時間経ったか否かという頃、キュルケの話が一段落した。素子は、両手で頭を抱えて唸っている。

「つまり、何か……。貴女のその使い魔召喚の儀式とやらに巻き込まれて、私は地球でさえない、何処とも知れぬ世界に引き摺りこまれたということか……」

草原で体育座りして向かい合う相手を、素子は恨みがましい視線で見据えた。端整で鋭い目付きを向けられ、キュルケは二の腕にさぶいぼが出るのを感じながら誠意を込めて答えた。

「多分そういうことだと思うわ。人間が呼び出されるなんて前例がないけど……ごめんなさい」

どうしてくれる、責任取れと怒鳴りたい気持ちだったが、素子は

何とか堪えた。ひなた荘でも、はちゃめちや騒ぎに巻き込まれるのは日常だったが、これは極め付けである。異世界に吸い込まれるなど、寮での破天荒な日々でさえ平々凡々に思えてくるほどだ。

丹田に意識を落としながら深呼吸して、素子は尋ねる。一縷にして最大の望みをかけて。

「それで、私は元の世界に返してもらえるのだろうか？」

抜き身の刃のような炯々とした眼光に、キュルケは急に呼吸が苦しくなった。

正直なところ、召喚した使い魔を送り返す方法など伝わってもないし、前例も聞いてない。

しかし、それを正直に言おうものなら、この決死さを実体化したような重圧で窒息させられるのではないかと彼女は危惧した。殺気にも似た不可視の力に、怒らせるとんでもない目に遭わせられそうな気がしたのだ。

「わ、私の魔法の先生に相談してみましよう。何かいい方法があるかも知れないし。私は所詮未熟な一生徒ですもの」

自分より豊富な知識と実力もある筈の教師に責任転嫁しよう、キュルケは誘導してしまった。

ずるい気がしないでもないが、同時に仕方がないとも思う。相手ははっきり言って恐ろしいし、未知の現象を自分だけのせいになされるのは合点がいかない。

そもそも生徒なんて未熟で当たり前。教師はそのフォローをして教え導くためにあるのだ。押し付けるのではなく、手に負えないことは頼って当たり前、それで給料をもらっているのだから。

自身の中で色々と言いつくすキュルケに対し、当の素子はと言うと、これまたはあと溜息一つ。そして頭をぺこりと垂れた。

「よろしく頼む。帰れないとなると、先輩や友人達が心配する」

家族という言葉が出ないことが少し引っ掛かるキュルケだったが、そこは別段詮索する所ではない。色々な意味で自分を救うため、まずは目的地に向かうべし。

「じゃあ、一緒に飛ぶわよ」

フライの魔法で自分を浮かせ、レビテーションの魔法で素子を宙に浮かすと、キュルケ達は気流に滑空する鳥のように、学院の建物へ向けて飛んで行った。

「なるほどのう。人間、それも異世界の者が召喚されるとは、わたしも聞いたことがないわい。何かの前触れなのか」

魔法学院の長、オールド・オスマンは机の上で両手を組み合わせ、てしばし沈黙する。見た目は相当の高齢だが、実年齢はそれどころではないとの噂も囁かれる、国内でも有名な老メイジ。その人物の博識をもってしても、今回のようなケースは思い当たらないと言う。

「とりあえず、ミス・ツエルプストーはミス・アオヤマと契約を交わすべきと思いますが」

眼鏡にザビエルカットの中年教師コルベールの言葉に、キュルケは舌打ちを隠さなかった。

しまった！ このハゲ、余計なことを！

「そんな！ 召喚をやり直させてください！」

「それはダメだ。ミス・ツエルプストー」

「どうしてですか！」

「彼女を戻す術が、今のところ見付からないからだ。故に、今の状態で別に召喚し直そうとしても失敗するだろう。過去にそういう事例があつたと記録にある。それに」

必死な生徒の訴えに対し淡々と諭すコルベールは、コホンと咳払いして、言葉が続けた。

「春の使い魔召喚は神聖なる儀式、好むと好まざるに関わらず、彼女を使い魔にするしかない」

この石禿頭、と当たりちらしたい気持ちを手の中に握り締めながら、キユルケは未練がましく学院の最高権力者を見遣るが、

「ミスタ・コルベールの言う通りじゃよ。わしらも出来る限りの協力はするから、契約を結びなさい」

万事休す。その言葉を烙印代わりに刻み付けられたキユルケは、思考の切り替えにエネルギーを集中し始めた。

退学してでも断ると言うだけでは、一方的に召喚された彼女が黙ってしまい。自分の身の振り方どうこうより、彼女に対して責任を取らなければ、命を狙われかねない。息苦しくなるほどのあの殺気は尋常ではなかった。

あれに狙われ続ける上に、別の使い魔とも契約出来ず、わざわざ国外留学までした上での退学なんて、実に馬鹿馬鹿しい話だ。論外人間を召喚したなんてことは、どうせ隠しきれものではないだろう。ならば、この恥は受け入れて、より最善を目指すしかない。言いたい者には言わせておけばいい。陰で自分を揶揄する者はこれ

までもいたのだ。美しい私にとって、基本的に男性は味方で、女性
は敵のことが多かった。尤も、今回のことで男性の中に私を見下す
者が現れたなら、腹立たしく残念なことであるが。

学院長からも申し付けられたことだし、この娘を使い魔にするし
かもう道は無いだろう。ならば、彼女を納得させつつ、長所を探し
て活かす方が建設的だ。

「モトコ、申し訳ないけど、先生方もすぐには貴女を元の世界に返
す方法は見つけられないみたい。私も先生方も協力して探すから、
契約して私の使い魔になってくれない？」

さっきのような殺気と共に暴れ出すのではないかと、キウルケは
背筋に寒いものを感じながらも願いを込めて申し出た。しばしの沈
黙を挟んで返された言葉は、意外なくらい落ち着いたものだった。

「使い魔の契約とやらをしたら、私はどうなるんだ？ そもそも人
間が動物のような使い魔になったりして平気なのか？」

尤もな疑問。それに対してキウルケは、絶対の確信のない言葉な
がら自分のペースで話す。

「契約出来ないような存在が召喚されることはない筈よ。問題無い
わ。それに、何のつても無いまま見知らぬ世界に独りでいるより、
私といった方が何かと都合がいいわよ。実家は裕福だし、色々と融通
も効くと思うわ」

神奈川での寮暮らしでも、騒がしい隣人達によって、いつも思わ
ぬ方向に流されてしまう素子は、キウルケの言葉にもそれと同質の
ものを感じて危惧を述べたが、回答からすると悪くない話である。
逆に警戒してしまうくらいに。

「私にとってはありがたい話だが、そこまで便宜を図ってもらう以上、相応の対価を払わねばならんのだろう」

「さっき話したとおり、私達メイジは使い魔の助力を得て、戦闘では詠唱中の隙のカバーや、それ以外では探索・索敵作業等で助けてもらうの。貴女に、そういったことをしてほしいの」

数秒おいて、素子はキュルケの問いに銜いもなく答えた。

「私は魔物退治を使命とする一族に生まれ、幼少時より超人的な武技を習得してきた。この世界の魔物の力は知らぬし、師に比べれば未熟ではあるが、全く自信が無い訳でもない。探索・索敵は専門ではないがな」

「結構よ。それで、その木刀で戦うの？」

「基本はそうなるが、得物は問わぬのがうちの流儀だ」

淡々としながらも堂々とした自信を感じさせる素子の言葉に、キュルケは期待したいと思った。どれほどのものか未知数ではあるが、先程の殺気といい、只者ではないと思わせるものがある。こうなった以上、是非そうあってほしいものだ。

「じゃあ、契約していいわね」

断ったところで、何一つ好転するとは思えない。知識も知人もないこの世界で、まずは衣食住を確保しなければならぬなら、選択の余地も無い。このキュルケも、悪い人間ではないと思いたいが、もし自分を利用したり危地に陥れようとする悪者だったら……いや、何もかも疑っているのは、見知らぬ世界に孤独で彷徨う破目になるだけ。それは最後の選択肢にしておきたい。

結局、利点と欠点をひっくるめて比較衡量した結果、素子は期待

値の大きい方を選んだのだった。

「貴女の世話になろう」

「ありがとう。貴女の快適な暮らしや最終目的のために、できるだけのことはするわ。では、始めるわね」

キュルケは目を閉じて、木の杖を素子の前で振り、呪文の詠唱を開始した。

「我が名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツエルプストー。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

素子のやや広めの額に杖が当てられると、目を閉じたままのキュルケの顔がすつと近付いてきた。意表を突いた行動に、素子は驚きの声さえ上げる間も無く唇を奪われた。

「なっ、なっ、なっ」

接吻！ それも同性に！！ 異性の見る前で！！！！

何をするかつと右手を振りかぶりながら怒鳴ろうとした瞬間、素子の全身が灼熱した。

「こっ、これはっ！ 私に何をしたっ！？」

常人より苦痛に耐性のある彼女でも、片膝付いてしまうほどに焼け付くような痛みだ。キュルケは、そんな彼女に視線を合わせるようにしやがみ込んだ。

「大丈夫、もうしばらくの辛抱だから」

そこから先は、齒を食い縛って痛みを押し殺した素子は流石だった。剣の師である実姉の鶴子にぶっ飛ばされまくった修行の日々あればこそ、常人なら悶え苦しむほどの激痛にもすぐに慣れることが出来た。

やがて、熱さが消えると、彼女の手の甲には見たことのない文様が浮かんでいた。

「無事契約出来たようだね。では、オールド・オスマン」

「うむ、君達のことについては、ミス・ツェルプストーが言ったように私も出来るだけ協力しよう。大事な生徒とその身内のことだからね。そして」

いかにも威厳のありそうな咳払いをすると、オールド・オスマンは真摯に素子を見つめながら続けた。

「これは是非聞いてもらいたいのだが、君のやってきた異世界のこととは秘密にしてもらいたい。もし知られてしまったら、国の研究機関に拘束されて被験体にされかねん。更に、ろくでもない連中に身柄を狙われる恐れもある。六千年の歴史を持つこのハルケギニアにおいて、君のような存在は異例なのだよ」

男の眼前で女に接吻された恥ずかしさは、学院長からの警告の言葉に軽く吹き飛ばされてしまった。

訳の分からぬまま異世界に召喚され、帰る方法も分からぬまま、出自を隠さねばならない立場。一体私が何をしたと言うのだと彼女が怒りに駆られるのも、無理のないことと言えた。

「君にとっては腹立たしいことと思うが、出身はこの世界の遙か東方未開の地“ロバ・アル・カリイエ”ということで通してくれ。そ

このことは誰もほとんど知らんから、そう言っておけば足の付くこととはない。悪いようにはせん」

キュルケだけでなく、このオールド・オスマンも、自分が生活していけるように、協力してくれると言う。学院長として、生徒の使い魔を不当な扱いから守ってくれらると言うのなら、右も左も分からぬ今、これまた信じてみる他ないのだろう。

「分かりました。よろしくお願いします」

ペこりと一礼すると、素子はキュルケに続いて学院長室を去った。召喚されてから今までほんの二時間程度だが、素子にとってはこれまでの人生で最も凄まじい激動の時間だった。色んな非日常・非常識な出来事が具現化して、洗濯機のようにかき回された頭の中が発熱したように感じ、その日はもう何もしたくなくて、ぐったりしたままキュルケの豪華なベッドに沈むだけだった。

キュルケの方は、召喚した側なので素子よりは精神疲労も少なく、色々気遣って話し掛けたが、相方は『こんなことになったが、仲良くやろう。詳しい話は明日からしてくれ』とだけ答えてボタンキーだったので、それ以上は言葉を交わさず、二人で寝てもまだ余裕のあるベッドに遅れて入った。

その翌日、彼女達を更なる驚きが襲うのだが、この時点では当然知る由もない。

第二話 凸凹主従（前書き）

第二話 凸凹主従

素子は山の中を駆けていた。

寮の裏山の修業場へ、木刀と背負った包みに入れた携帯食・薬類や着替えだけを持って向かっている。

岩場や木々を跳び渡る様は、野生の獣にも劣らぬ身軽さと敏捷さで、天狗の面でも被るうものなら、本物だと間違えられかねない。それほどに人間離れた動きである。

瀑布の流れ落ち砕ける音が聞こえ、目的地が近いと分かると、彼女は木の枝から地面に飛び降りようとした。枝から離れた次の瞬間、彼女が着地する筈の場所に、身長くらいもある楕円形の光が突如出現した。

「何っ!?!」

そう言うのが精一杯だった。光の中に足からダイブすると、素子は痺れるような全身ショックを受け、気を失った。

それから迎える初めての朝。質実剛健な武門の娘である彼女の朝は早い。五時にはすっきりと目を覚ますと、慣れないベッドから上体を起こし、周囲を二、三度見回す。隣には赤髪褐色肌の美女がすーすー寝息を立てている。心なしか酒臭い。

「やはり、夢ではないのだな……」

頬を抓ってみるが、痛いだけ。目はきっちり覚めている。昨日あ

ったことも全部はつきりと覚えている。

「生きていかなばな。そして、必ず帰る」

脇の風呂敷から写真を取り出すと、ビニールシートに入れてある
それの中では、愛すべき友人達が並んで笑っている。

「みんな、私は元気にやっていきますから。どうかあまり心配しないでください」

仲間達との温かい日々を胸に、素子はくつと歯を食い縛る。負けるものか、逆境などに屈しないと自分自身に誓いながら。

その日の授業中、素子は周囲の好奇の視線を望まずながら集めていた。まるで動物園の檻にでも入れられたような気がして、彼女はずっと胸糞が悪かった。

それが人を超える態度か、私が何をしたというのだ。そう怒鳴りつける代わりに、刃のような視線で何人か威嚇する。見るんじやない。

殺気が十分ではないためか、怯んで目を逸らす者もいれば、一旦逸らした後もちらちら見てくる輩もいる。度が過ぎて、教師から立たされる者さえいた。

素子は不当に侮辱されているように感じ、全く不愉快だった。木刀を強く握り締めたまま、隣のキュルケを見ると、彼女はポーカーフェイスで黒板方向を見ている。よく見ると、女子の中にはキュルケに嘲るような視線を向ける者達がいるのが分かる。

それでも平然としている彼女を見ると、自分が未熟者だと言外に指摘されているように感じ、素子は少々恥ずかしく思った。故に、そこからは授業に集中することで無視を決め込んだ。授業の内

容は大して理解出来なかったが。

そうした日々を幾日か過ごす内に、素子はキュルケのことが少し分かり始めた。

彼女は男子生徒に非常にモテる。その美貌と肉感的な肢体は、他の女子生徒とは比べ物にならないほど女性的魅力を振りまいている。将来有望そうな可愛い娘は他にもいるが、色気という点ではキュルケの足元にも及ばない。と言いか、比較すること自体が無謀なほどの格差がある。

休み時間の彼女は、数人の男性に囲まれちやほやされて、さながら学院の女王様である。周囲の女子達からは、妬みが主要因である。う敵愾の視線がしばしば放たれているが、当の本人は蚊が刺したほども感じていない様子。

取り巻きの男子達が、彼女を気遣うように素子のことを尋ねると、『ロバ・アル・カリイエから来た、美しくも頼れる私のパートナー』と無難に紹介した。男子達はそれ以上言及せず、女王様を中心としたコミュニケーションを楽しむのだが、素子は蚊帳の外なので、外から静かに見守りながら、考え事をして時間を潰していた。

そして、夜は夜で男子とデートに出掛けるキュルケに対し、生真面目な素子はそれを不純異性交遊と捉え、あまり良くは思えずにいた。尤も、苦言を呈する立場でもない彼女はさっさと寝てしまい、寝付いた後にこっそりキュルケが帰って来るのである。

男子には強い人気を誇る一方、キュルケは女子からの人気はないようだった。それどころか、前述の理由で妬まれることが少なくないらしい。そんな彼女の学院内唯一の友人が、タバサという小学生くらいに見える小柄な女の子である。

青いショートカットの髪に縁眼鏡を掛けた彼女はとても寡黙で、暇さえあれば本ばかり読んでいる。社交的なキュルケの方から色々

と話し掛けるのだが、せいぜいポツリと単語の一つ二つで返すばかり。髪と肌の色、体格、性格と何から何まで見事に好対照な二人であるが、それ故にお似合いとも言える。

三人でいる時は、話し上手なキュルケが二人に話題を振り、素子が主に応対して、タバサがたまにポツリと返すという感じで、上手く場が回っていた。いかにも楽しそうなキュルケは当然として、素子も結構楽しめたし、タバサもキュルケによると満更でもないらしい。素子も無駄口をあまり叩かない方なので、極端なくらい寡黙なタバサに対し、悪い印象を持つことはなかった。

そういつた会話の中で、二十歳以上と思っていたキュルケが実は同い年だと分かり、普段は飄々とした彼女が憤慨をどうにか笑顔の下に隠す様を見て、素子は心から謝りながらも、やはり同い年の娘なのだなと感じる一幕もあった。

そんなある日の午後のこと。素子が召喚された辺りの草原で、授業が行われていた。教鞭を取るのは、あのミスタ・コルベールである。

小柄な桃色の髪の子生徒が、生徒達の人垣の中心に一人立っている。周囲からはからかいの聲が飛び交い、中央で独り立つ少女は気丈にも睨み返し、言い返している。武門に生まれ育った者らしい義侠心に富む素子には、その様が虐めにも見えて不快だった。あまりに度が過ぎるなら助太刀したいと思うほどに。

「キュルケ、あの中央にいる娘は、何故こんなにかかわれているのか？ 貴族の子女と言うには、あまりに低俗な罵声が飛び交っているのだが」

「それはね、あのルイズって娘が、貴族の子女でありながら、入学以来一度もどんな簡単な魔法も成功したことのない、学院始まって

以来の落ちこぼれだからよ。貴族は魔法が使えるから平民と一線を画すのであって、使えないなら貴族社会では爪弾きにされても仕方ないの」

何でもないことのように話すキュルケの言葉を聞き、素子は胸の奥に忘れていた痛みを思い出した。忘れようとしていた、忘れ去りたかった痛みを。

幼少時より厳しく鍛えられてきた素子。姉やその仲間達は、心技体全てにおいて非常に強靱な退魔師揃いで、人知れず闇に跋扈する魔物達を数多狩っていた。彼女等は、幼い素子の憧れであったが、同時に泣き虫で心の弱い彼女にとっては遙か高い壁でもあり、彼女は成長するにつれて自他のギャップと、その差を埋めなくてはという重圧に苦しむようになる。それが限界に達し、『うちには無理やみんなみたいに強くないもん』と言って、実家を逃げるように出たのが中学の終わり頃である。

修行のために家を離れたということになっているが、本当のところは寮の仲間達にも話していない。こんな弱い自分を、友達として大事にしてくれるのに。

「私と、同じか」

ルイズを見つめながら、知らず知らずに呟く素子の目頭が熱くなっていた。

周囲の者達より出来が悪くて苦しみながらも、逃げ出さずに懸命に努力する姿。逃げる前の自分、そしてもしも逃げ出さなかった場合の自分と、あの少女の姿がやけに被って見えたのだった。

「ゼロのルイズ、いい加減に成功させるよ」

「お前のせいで、最近授業が止まったままだぜ」

「みんなに迷惑だから、今日で出来なきゃお前だけ留年な」

罵声の方向を、素子は本気で睨んだ。頭に血が上ったのは一瞬で、次の瞬間からは妙に落ち着いて深く静かに息を吐き、吸えた。

これ以上下種な戯言を吐くなら、剣で黙らせる。

決意を固めた素子が、ルイズから視線を外していた十数秒の間に、周囲からは歓声とも罵声ともつかぬざわめきが生じ始めた。

「おい、ルイズが人間を召喚したぞ！」

誰かの第一声が、簡潔に状況を皆に知らせた。場の全員の視線が、ルイズとその眼前に尻餅をつく黒髪の少年に、スクールとなって降り注いだ。

「モトコ！」

キュルケが驚いた様子で隣人に呼び掛ける。素子は、言外の意を悟って首を縦に振り、再び中央を凝視した。そして、キュルケにひそひそと耳打ちする。

「実際に話してみないとはっきり言えないが、容姿からすると、私と同じ日本人の可能性が高い。あとで彼と話してみるつもりだが、いいか？」

キュルケは真剣な面持ちで黙って頷いた。真実が何にせよ、あの少年が自分達の今後になんか影響を与えることが予想される。見下していたルイズに肩を並べられたこと以上に、そのことが彼女の大きな関心事であった。

彼女たちが話している間に、中央の方は状況が進行していた。ルイズは、召喚した少年と契約の儀式、即ちキスをしているところだった。

「あちちちちち！」

そして、お決まりの熱と痛みのような。少年は叫んで転げまわっているが、素子はこう言いたかった。男だろう、我慢せんかと。

ルイズ達の契約が済むと、彼女達とキュルケ達以外は空を飛んで教室へ戻って行った。少年に向けられた、ルイズのヒステリックな怒声が聞こえたが、素子は構わず少年の方へ歩み寄った。

「君、君はひょっとして日本人か？」

「え、そうだけど。……て言うか、君もなの？」

驚いて指差す少年に、素子はいい顔が綻んでしまう。理不尽とも言える成り行きで、異世界に召喚されてしまったが、まさかこんな所で同胞に遭えるとは。これは奇跡的と言うべきではないか。

「ああそうだ。私は青山素子、神奈川県在住の高校二年生だ」

「俺、平賀才人。東京都の高校二年生。よく分からない状況だけど、とにかくよろしくね」

差し出された手を、素子は力強く握り返した。

ああ、何とありがたいことか。彼女は、心からありがとつと言いたい気分だった。

「平賀君もあの光の中に吸い込まれたのか？」

「うん、秋葉原で。それで気が付いたらここにいて、この娘にいきなりぶちゅつと」

「ぶちゅつて言うな！」

ルイズの細っこい足が下段を走り、才人の太腿を蹴っ飛ばした。

「痛えっ！ いきなり何すんだよ」

腕組みして彼を睨み上げる小柄な少女に、素子ははたと視線を向けた。

人形のように可愛らしいとはこのことだと、彼女は思った。

春の日差しを思わせるような、桃色がかったブロンドの髪に、白磁のような肌。体つきはあのタバサよりは大きいものの小柄であり、顔立ちはくりつとした大きな瞳と小さく通った鼻筋に、薄く透明感のある唇。

自然にあるのではなく、誰かがわざわざ作ったのではないかと思えるような、繊細で上質なパーツをもつて、絶妙のバランスで組みあがった存在。ただし、生命が宿っていることは、可愛らしい顔いっばいに満ちた怒気が証明している。

「あんたのせいで、またみんなに馬鹿にされたわ！ その上、キユルケの使い魔と仲良くするなんて、許せない！」

びつと小さな人差し指を突き付ける美少女。才人は、好き放題言ってくる、ファーストキスの相手にむかつとしてしまう。

「お前、何言っただよ！ こつちこそ、お前のせいでわけ分からん所に呼び出されて、痛い目にも遭わされて、偶然同じ日本人と遭えたかと思っただよ、それにもケチを付けるなんて、冗談じゃな

いよ！ 俺に何か恨みでもあるのか！」

「それはこつちの台詞だわ！ とにかく、後で説明してあげるから、私の使い魔になった以上は、言うこと聞きなさいよ」

「交友関係に口出さないならな。青山さんとここで出会えたのは、どこぞの薄情な神様が俺に一つだけ恵んでくれた宝みたいなものだ。彼女と口聞くなって言うんなら、お前は俺にとって悪魔も同然、言うことなんて聞けないね」

「何ですって。あんた、何様のつもりよ！」

「平賀才人、十七歳。東京都在住の高校二年生だ。お前こそ、何でそんなに偉そうなんだよ」

「ヴァリエール公爵家と言えば、この国では知らぬ者などない名門中の名門よ。私はその三女だもの。本来なら、あんたみたいな平民なんて、話をする機会も無いのよ。ありがたく思いなさいよね」

「知らん。名門貴族のお嬢様だろうが、余所者の俺には関係無いね。それより、俺のこと気に入らないんだろ？ だったら、俺を日本に帰してくれよ。それで、旅費を立て替えてくれると助かるんだが」

ルイズが首を傾げたところで、漫才のようなやり取りが滞った。

一連の流れを眺めていたキュルケは、そこで凸凹コンビに近付いて言った。

「お喋りが乗っているところに口挟んで悪いけど、先日私達が学院長に相談した際のことを教えてあげる」

その内容を聞いた才人は、顔色がみるみる悪くなって、その場に跪いてしまう。

「嘘だろお……帰る方法を誰も知らないって、そんな……」

苦さと厳しさの入り混じった表情の素子が、彼の眼前で片膝付き、

その肩に手を乗せて述べる。

「私もそれを聞いた時は落ち込んだものだが、協力者もいるということだし、今は前向きに考えている。一緒に力を合わせてやっていこう」

素子が差し出したもう一方の手を、暫くしてから才人は取った。あまり力が入ってなさげだったが、俯く顔を上げるとまだ情けない表情ながらも、気持ちを振り絞って答えた。

「こちらこそよろしく頼むよ。本当に頼りにさせてね。俺で出来ることなら何でも協力するから」

男子としては少々情けない台詞だが、常識の範疇外、未曾有の事態に面してこれだけの反応が出来るなら、寧ろ適応力は低くないと素子は感じた。

何処とも知れぬ世界に放り込まれて、どんな偶然か出会えた貴重な同胞だ。大切にしようと思おう。

「話が終わったんなら、もう行くわよ。一応授業中なんだから」

徒歩にて教室に向かうルイズと才人に、キュルケ達もわざわざ合わせた。道すがら話したいことがまだあったので。

「ルイズ。授業が終わったら、貴方達も学院長に相談した方がいいわよ」

「分かってるわよ。どうぞお構いなく」

にべなく返すルイズに、才人は不安を覚えた。

似た境遇同志で力を合わせた方が絶対いい筈なのに、このルイズ

ときたら、キユルケに対して敵意を顕にしている。顔は滅法可愛い
しいが、性格はきつそうだし暴力も振るうし、これでは先が思いや
られる。

各々頭を巡らせながら歩く四人が学院の敷地に入ったところで、
授業の終了を告げる鐘が鳴った。

第三話 才人の雇われ先

学院長室でルイズ達が告げられた内容は、先日キュルケ達が告げられた内容とほぼ一緒だった。使い魔の役割について、才人は遙か東方のロバ・アル・カリエイエから来たことにしておけ、元の世界に帰るための調査やこちらでの生活の便宜は図るということである。

苛々しながら歩くルイズに、才人の方からも話し掛けはせず、二人は無言で寮のルイズの部屋へと向かっていた。ルイズの部屋に入ると、中は十二畳ほどの大きさで窓を南側に、ベッドが西側に置かれ、北側に扉が、東側には大きなタンスがあった。部屋の中にあるあらゆるものが、彼には高価なアンティークに見えた。

「ねえ、あんた？」

暫くの沈黙を破ったのは、あまり愉快ではなさそうなルイズの声だった。

「何だ？」

「あんた、キュルケの使い魔の黒髪の娘と同じ国の出身って言うてたわよね。あんた達、本当に全く別の世界から来たの？」

『Exactly』、とさほど豊かではないボキャブライリから引っ張り出して、慇懃に答えてやろうかとも才人は思ったが、こちらの世界で英語が通じるか分からないので止めておく。

「そうだよ。学院長室で言ったとおりだよ。信じられんかも知れんが、俺は嘘なんて言ってるねえ。こっちだって、全く未知の世界に呼び込まれて帰れないなんて信じたくないけど。でも事実だもんな」

才人の方も、表情・声共に気力がいまいち不足して見えた。それは、気の進まないことをやらされる時の、ぶすっとしてくさった心境に似ていた。

「何か証拠はある？」

「証拠か」

才人は、背中に背負ったナップサックを開いて中を覗く。その中で、一番相手を納得させられそうなものを彼は取り出す。

「これ、見てみ？」

電源ボタンを押すと、ノートパソコンの真つ黒な液晶画面にぼやっつと光が灯る。そして、OSの商標がアルファベットで示され、起動していく。

「この光、何の魔法！？ 何かの古代文字！？」

ルイズはすぐに興味しんしんになり、先の機嫌の悪さはどこかに吹っ飛んでしまった様子。怒ってなきや可愛いじゃん、と才人は画面と彼に接近する彼女のいい匂いにどきっとしながら説明しようとした。

「まあ、この山はこの山！？ 見たことないわ」

その直前でデスクトップの壁紙が映り始めたので、ルイズは更に驚く。可愛いし怒らないからずっとこのまま驚きつ放しでいてくねえかな、と才人は口に出す代わりに説明を行った。

「これは、俺の国で一番高い山『富士山』。高さは三千七百七十六メートルで、昔から様々な画家の絵に描かれたり、詩や歌の題材になったりしているんだ」

「ふん。雪が上の方に掛かってて綺麗ね。高さ三千七百七十六メートルってどれくらいのこと？」

「こんぐらいがメートル」

好奇心が熱を帯びて稼働しているルイズからの質問に、才人は自分の下腹部の辺りに手を当てた。

「大体一メートルくらいね。じゃあ、結構高い方ね」

「俺の国ではね。ちなみに、俺の世界で一番高い山は八千八百四十八メートルもあるからな」

「じゃあそれも見せて」

「生憎、その画像入ってないんだわ」

「何よ、見れないってこと？」

浮き浮き状態から一変、残念と不満の合い掛けになったルイズだったが、それもまた純粋な子供のようで愛らしかった。

「そゆこと。でも、これで俺が別世界から来たって話、信じてもらえたかな？」

「そうね。こんなマジックアイテムもさっきの文字も見たことないし、信じてもいいわ」

「そりゃどうも。じゃあ電源落とすから」

シャットダウンの操作をすると、十秒ばかりで画面が暗転した。ルイズは玩具を取り上げられた子供みたいに悲しげな顔になった。

「ちょっと、もう終わりなの？」

「電池が少ないからな。そろそろ無駄使いできないの」

パタンと二つ折りに閉じたパソコンを、才人はサック内に戻した。本当は、秋葉原で買っておいた、手動の充電器を彼は持っているの
で、握力の酷使を省みなければ、こちらの世界でもパソコンを使い
続けることは一応可能なのである。

しかし、自分の大事な娯楽道具であるこれを、ルイズにただ同然
に思われることは避けようと彼は咄嗟に考えた。横暴で偉そうな娘
だから、『お前のものは俺のもの』というジャイアニズムを適用さ
れた拳句、自分をこき使って終日充電マシンとさせられた日には
堪らないと危惧したのだ。有限なものとして、勿体ぶった方が得だ
と彼は考えたのだった。

「つまらないわね。また今度見せなさいよ。それじゃ、次の話に入
るけど」

次の話って何だ。才人は何となく嫌な予感がした。

「学院長も言われたとおり、あんたには使い魔の仕事をしてもらっ
ただけど、あんた私の護衛とか触媒になる道具の探索とかできる？」
「できない」

即答だった。彼には武術の心得も無ければ、トレジャーハンター
の知識も無い。もし仮にできたとしても、相手がその人のために働
きたいと思えるような人かという問題もある。

それに対して、ルイズの反応は意外にあっさりしていた。彼がそ
う答えるのが分かっていたかのようにである。

「案の定ね。それならいいわ、仕方ないから別の仕事あげる」

そう言つと、ルイズはベッドに腰掛けて何かを掴み、才人に向けて放った。

「おっと。　んなっ、なんじゃこりゃあっ!!」

白布を掴み取ってから数秒後、彼が生まれる前にやっていた有名刑事ドラマの台詞を、知らずに叫んでいた。

「それ洗濯しときなさい」

しれつと言つるルイズとは対照的に、才人は狼狽が収まらぬまま声を震わせる。

「だだだ、だつて、だつてさ、これ、パパパ、パンツじゃねえかつ!?!」

「そうよ」

「そうよじゃねえだろ!　年頃の娘が、歳の近い男にパンツ洗わせるなんて、な、な、何考えとんじゃあ!」

両耳を指で塞ぐルイズは、面倒そうに言い返す。

「大声出さないでよ、もう。使い魔にパンツ洗わせるくらい、何だつて言つのよ」

何ですと。才人は、ルイズの今の言葉を反芻する。

「あんたは使い魔だから、別にパンツ洗わせてもはしたくないし、恥ずかしくもないの。分かった?」

使い魔だから、パンツ洗わせても恥ずかしくないつてか。俺が使

い魔だから。俺にパンツ洗わせても恥ずかしくない。俺、使い魔。動物は男じゃねえってか。ふーん。

わなわなと肩を震わす才人は、人の、そして男の尊厳を深く傷付けられ、憤懣やる方無かった。言葉で傷付けられたなら、言葉で返してやる。彼は、幾つかの選択肢の中から、何が一番相手の感情を傷付けるか数秒で判断し、言い放った。

「じゃあ、俺のくせーパンツと一緒に洗うから、パンツが臭くなっても文句言つなよ」

かなり下世話な返しだった。しかし、この無礼な少女に対して好意を稼ぐつもりも、礼を尽くすつもりもなかったので、才人は平然として相手の反応を待ち構えた。

「あ、あんたっ、何て下品なこと言うのよっ！」

びしいつと肉を叩く音が、隣の部屋まで聞こえたかも知れない。

「くっそー、あの無礼女、ちっこいくせしてなんちゅうビンタしやがんだ」

ほっぺに見事な紅葉を作った才人は、そこをさすりながら寮の廊下を歩いていた。ルイズとは喧嘩別れして部屋を追い出されてきたのだ。

「最初に下品なこと言い出したのはお前の方だったの。ったく、わけ分かんねえよ」

ぶつくさ言いながら歩く才人は、そのまま順当に進めば寮から出て行くところだった。しかし、この時の彼には奇縁があったらしい。入口で自分とさほど変わらぬ背丈の少女二人と出会い、髪の高い方から声を掛けられたのだ。

「平賀君、どこかに行くのか？」

何気ない素子の問いに、才人は愛想良い表情は作れないが、乱暴な口調にならないよう思いを述べる。

「ルイズと喧嘩したんで出て来たところ。行くあては特に無いけどね。青山さんは、俺みたいに外れを引かなくて良かったよ」

彼の半ばやけくそ気味な表情と言動に、素子は心配になった。自分とキュルケのように上手くやれてないのなら、本当に追い出されて行き倒れになるのでは、と貴重な同胞の身の振り方を案じずにはいられない。

「穏やかではないな。私で良ければ詳しく話してみないか？」

「同感ね。どう、私の部屋でお話しない？」

腹立たしくて愚痴を聞いて欲しかったことや、独りになる心細さもあって、才人は二人の申し出にあっさりと応じた。

キュルケの部屋は大きなタンスといい、天蓋付きの広いベッドといい、何もかもが豪壮華麗であった。ルイズの部屋のアンティーク類も高級感漂うが、この部屋の物に比べれば、質素で機能性重視と言える。

キュルケは杖を取り出すと同時に、短い呪文を唱えながらそれを軽く振るった。それと同時に、光の粉が部屋を舞う。

「じゃあ、何があったのか話してくれるかしら」

部屋の中を舞う光の粉が無くなると、キュルケは椅子に腰掛けて長い足を組んだ。その隣には、背筋を伸ばして着席する素子がおり、才人は彼女達とテーブルを挟んで向き合う形で、先程の経緯を話した。

「なるほどね。格式あるヴァリエールの言いそうなことだわ。お高いと言うかお堅いと言うか」

「だろ？ 人を人とも思わぬ態度に腹が立ってさ」

自分に同調してくれそうなキュルケの意見に、才人は勢い付いた。自分じゃなくて相手がおかしいんだと、彼は分かって欲しいのだった。

「だが、君の下品な発言は反省すべきだと思うが」

「うっ、すみません」

生真面目な素子は、その所は忘れずに釘を刺した。才人とて、本来女の子にそういうことを言うべきでないことくらいは分かっているのだ。

「トリステインの貴族って、やたらとプライドが高くて堅物で面白みが無い人ばかりなのよね。ルイズの実家のヴァリエール家は、トリステインを代表する名門だから、そういう連中の筆頭と言えるわね」

説明を受けると、才人はますますルイズのことが嫌になってきた。あのこの上なく可愛らしい顔を思い浮かべると、気分が滅入ってく

る。

「そうなのか。あゝやだやだ。あんな酷い奴に仕えるなんて冗談じゃないよ。俺のことを農耕馬程度にしか見てないんだぜ、ありゃ」

腕を組んでふんぞり返る彼の表情は、既に疲れが見える。若者らしからぬ気力の欠如に、素子は自分がまだましな方だと自覚すると共に、何とかしてやりたい気持ちに駆られた。

「かわいそうに。相手の気持ちも分かってあげられない主人なんて、最低よね。そこへくると、ゲルマニア貴族はそんなにお高くないし、情が深くていいわよ。良かったら、私の所に来る？」

一も二も無かった。どこを取っても非の打ち所が無く美しいキュルケの微笑は、荒んでいた彼の心を大いに潤した。

「いいの！？ そんなありがたい話、是非お願いします。青山さんも、不束者ですがどうかよろしくお願いします」

ペコリペコリとコメツキバツタのようにお辞儀をする才人を見た素子は、すぐに隣に視線を配る。

「私としてもそうしてくれるのは望ましいが、いいのか？」

「別に一人くらい増えたところで問題無いわ。私は彼を傷付けるような扱いをするつもりはないから。彼が納得のいく仕事をしてもらうわ。例えばそうね」

少し考えてから、キュルケは才人に初仕事を命じた。

「貴方達の世界のことを色々聞かせてちょうだい」

才人は、ナップサックからノートパソコンを取り出して電源を入れた。

同じ頃、壁を隔てた隣では、ルイズが一人苛々していた。

自分の言うことを聞かなかつたばかりか、下品な言葉を言い返した拳句に出て行った無礼な平民。帰って来たらどうしてくれようかと部屋の中を行ったり来たりしている、隣の部屋から賑やかな声がする。苛々が募っていた彼女は、注意しに隣室のドアをノックした。

「ちよつと五月蠅いわよ。喋るなどは言わないけど、静かにしなさいよね」

向こうからドアが開くと、部屋の主の長身がルイズの視界の大半を隠した。すると、少ない隙間の向こうに、さっきまで自分といた黒髪の男の姿があった。

「あ、あんた、何やってんのよ！」

ルイズは驚き半分怒り半分で声を上げた。まさか、先祖代々不倶戴天の敵であるツエルプストーの部屋に彼がいるとは思ってもよらなかったから。

「彼ね、貴女の扱いが酷くてもう嫌だって言うから、うちで雇うことにしたの。モトコの補助とか色々してもらうつもりよ」
「ななな、何ですってえー!!!」

瞬間湯沸しと化して顔を真っ赤にするルイズを、才人はちらりとも見ようとはしなかった。

第四話 ルイズの苛つく一日

「ふざけるんじゃないわよ！　なんで私の使い魔があんたに雇われなきゃならないのよ！」

「さあ？　そんな感じだからじゃない」

最大の敵に使い魔を取られる。他の誰かならまだともかく、よりによって最も奪われたくない相手に取られる。

先祖代々、血で血を洗う抗争を繰り返して、拳銃の果てに、恋人や妻を寝取られたご先祖もいるという、正に仇敵にして宿敵。ヴァリエール家にとつて、トリステイン王家に仕えることが公としての使命なら、ツエルプストー家を打倒することは私としての使命と言えた。

そう教えられ育ってきたルイズにとつて、目の前で起こっていることは、この上ない屈辱である。

「あんたじゃ話にならないわ！　そいつ連れて帰るからどきなさいよ」

円らな目を精一杯吊り上げて睨むルイズ。しかし、キュルケは平然とそれを受け流す。

「駄目よ。今のあんたじゃ、またサイトに酷いことするわ。今の雇い主としては、見過ごせないわね」

「誰が今の雇い主よっ！」

意図してかせずしてか、キュルケの言葉は一タルイズの癪に障った。なので、言葉を交わすことに、ルイズは一人でヒートアップしていく。

「話があるなら、頭冷やしてからになさい。じゃあね」

そんなことはお構いなく、ポーカーフェイスのキュルケはさつさと会話を打ち切ると、無造作にドアを閉めて魔法で施錠した。これでもう、ルイズの方から開けることはできない。ルイズは呆然とする暇も無く、乱暴にノックを繰り返しながら怒鳴った。

「ちょっと！ 開けなさい！ まだ話は終わってないわ！ 聞こえてるんでしょ！」

怒声と叩く音が静かな廊下に鳴り響く。しかし、部屋の中からは先ほど同様に三人の賑やかな声や、聞き慣れない未知の音が聞こえてくる。なんだか猛烈に悔しくていたたまれなくなつて、ルイズは小さな拳を握り締めて全身を震わせていた。

「ルイズ、五月蠅いわよ。何をギヤアギヤア騒いでるの？」

涼しげな声のする方を向くと、見慣れた金髪縦巻きロールの少女と、見慣れない魔物がいた。

「モンモランシー。何でもないわ。ちょっともめただけよ」

「それならいいけど、あまり大きな音は出さないでちょうだい。この子が怖がるわ」

モンモランシーの背後には、彼女の胸くらいまである大きな烏賊が立っていた。

身長の大半を占める頭部はえんじ色で、くねくねうねる十本足は黄褐色に見える。頭部をゆっくりと膨らませては縮ませ、足の一本には片側が細長い形状の貝殻を握っている。

「それ、あんたの使い魔？」

「そうよ。まだ小さい子供みたいけど、れっきとした使い魔よ。ねえ、プチ」

プチと呼ばれた烏賊は、キュキュツと鳥のような甲高い声で鳴いた。顔の両端に付いたまん丸い目からは、何を考えているのか読みとれそうもない。

「そんな幼いのに使い魔が務まるの？」

ルイズは至極当然の疑問を呈する。それに対して、主人が冷やかな皮肉を込めて答えた。

「あら、人間よりはマシでしょ。いずれ成長するんだし。さあ、行くわよ、プチ」

言葉に詰まって硬直するルイズの隣を、モンモランシー主従はすつと通り過ぎていった。一分ばかりその場に立ちすくむと、ルイズは軽い体重を懸命に足の裏に載せて、ずしんずしんと音を立て、歯ぎしりしながらその場を去った。どいつもこいつも、と呪詛のように負の感情を吐き出しながら。

蝶も小鳥も寄り付かないだろう怒りの公女は、やり場の無い苛立ちを発散させたくて学院の外に馬を駆った。近隣の森にでも一つ走りして心地良い風に吹かれれば、少しは気が紛れるかと思つてのことだった。馬脚の速度が上がると視野が狭くなり、ルイズは頭の中から考えるべき事柄が吹っ飛んでいく感じがした。それは一時的と

は言え、彼女の精神衛生上よろしくない類のものをデトックスする効果があった。

森に着いて馬から降りると、何やら人の話す声が聞こえてくる。男の声が二つ、聞いたことのある耳に嬉しくない声と、聞いたことのない耳に快適な声であった。気になったルイズは、手綱を側の木に結わえると、足音を立てないように声の方向へ近付いた。

離れた位置から木々の間を通して見えてきたのは、同学年の男子生徒でデブのくせに自分を馬鹿にするマリコルヌ。そして、見たことのない美しく大きな鳥であった。マリコルヌは、困った顔で鳥に何かを訴えている様子である。

「あと一週間でなんて、やっぱり無理だよ。お願いだから、僕と契約しておくれよ」

「私に釣り合うほどの強さも美しさもない凡夫とは契約できないと言ったろう。私を誰だと思っているんだい？ 数多の魔物達の中で最も美しい存在、『虹孔雀』だよ。私に認められるほどの人間は、それこそ最上級の者じゃないとね」

もう一押しすれば泣くんじやないかと思うほど弱々しい表情のマリコルヌに比べ、その虹孔雀なる人語を話す鳥の煌びやかさと言ったら、残酷なくらいである。

胴体の羽毛は薄紫を基調としているが、緩やかに曲がった二本の角や四肢、翼と尾が見事な七色をもって彩られている。虹を冠する名前そのものに、類を見ないほど色彩豊かで美しい大鳥である。

「一週間後、君を見定めに来るから。それまでに己を磨いておきなさい」

目も眩むような翼を羽ばたかせて、虹孔雀は飛び去っていった。地上からその姿を仰ぐ肥満児は、見ている方が情けなくなるような顔をしていた。

「はああ、どうしよう。強くなれたって、あと一週間でトライアングルメイジになるなんて無理だし、だからと言って彼に認められるほど美しくなるなんて、そんな魔法薬あるのか？ 無理だよ、どうしよう」

肩を落として側の木を叩くマリコルヌ。彼が泣き言を言う度に、ルイズは何故だか先程とは違う腹立たしさが沸々と湧いてくる。

「意気地無し」

つい言わずにはいられなかった。声のする方向に、マリコルヌは吃驚して視線をやり、また驚いた。相手は、自分が無条件に馬鹿にできる唯一の存在、『ゼロ』のルイズだったのだ。

「ルイズ！？ まさか、見てたのかい！？」

「たまたま遠乗りに来たら、聞こえてきたのよ。あんた、まだ契約してなかったんだ」

ルイズの可愛い顔に、意地の悪そうな笑みが浮かんでいた。マリコルヌは、普段馬鹿にしまくっていた相手に弱味を握られたと思うと、背筋が冷たくなる。

「頼むから、どうか皆には黙っててくれないか！」

「別にいいじゃない。どうせ一週間経てば、もう隠す意味も無くなるんだから」

そして、彼にとつては凍り付くような言葉で返される。マリコル
又には無理だという前提でルイズは考えているようだ。

「そんな言い方あんまりだよ！ 僕だって夜も眠れずに一生懸命や
つてるのに」

「さつきから無理だ無理だって泣き言ばかり言ってるくせに。ち
よっとばかり大変なことがあったからって、情けないわね。男の子
なら根性見せなさいよ！」

ルイズは怒っていた。マリコル又の泣き言を聞けば聞くほど、暖
炉に薪をくべるようにかつかと赤い感情が燃え上がるのだ。理由は、
彼女自身からないのだが。

「あんたがゼロだゼロだと馬鹿にする私だって、あの平民と契約で
きたのよ。魔法を使えるあんたが、相手が手強いからって諦めるの
！？ それなら一生使い魔無しでいなさいよ！」

吐き捨てるように言うと、ルイズは踵を返し歩き出した。そして、
馬の背に乗ると、学院までひたすら飛ばした。

どいつもこいつもムカつかせる奴ばかり、私の周りってるく奴
がないわ、と向い風の中にぶつぶつと彼女の不満が流れ出ていっ
た。

夕食後、女子大浴場で広い湯船に浸かりながら、ルイズは頭をか
らっぽにしようと努めていた。適温の湯に浸かりながら頭の中も適
温に戻すつもりである。この日は苛々することが連発したため、い
い加減彼女の神経も疲弊していたのだ。

しかし、残念なことに、彼女の目論見は外れてしまう。隣に、ル

イズとは対照的に褐色で肉感的な肢体が浸かってきたのだ。風呂場で見る度に、いつもム力つく体が。

「ふう」

ルイズには、キュルケが全身寛いでいるように見えた。

こちらが日がら苛々しつ放しなのに、見ているだけで腹が立つ。その馬鹿みたいにでかい胸も腹が立つ。生意気な自分の使い魔を手懐けたのも腹が立つ。とにかくもう何でもかんでも腹が立つ。

折角心の洗濯をしていたのに、また汚された気分になったルイズは、湯船から立ち上がって出ていくつもりだった。もう一つの魅力的な女体を見ることがなかったなら。

茫洋とした湯けむりの向こうから、珍しい黒髪の乙女が現れた。腰まである髪は、湯気に濡れて艶々と光沢を帯びている。それを見てルイズが連想したのは、月下に揺れる草原だった。

「ルイズ殿か」

中性的なハスキーボイス。男性並の長身と凛々しい目元も手伝つて、男装が良く似合いそうだとルイズはふと思う。ちなみに、彼女の母親も、背は素子のように高くないものの、凛とした美貌と平べったい胸のお蔭で、宮仕えしていた現役時代は見事に男として振る舞い切り、誰にも女だと気付かれることはなかったという。

それに比べると、素子の胸は中々のものである。タオルで隠している上からでも、十分な膨らみが分かる。肌も雪のように白く、腰はくびれ手足もすらりと長い。厚い布地の民族服を着ているから分らないが、同性の目から見ても非常に魅力的なスタイルだと

ルイズはつい見とれてしまった。

「湯当たりでもしたのか？」

十分以上湯船に浸かりつ放しだったルイズは、白い肌がほんのり桜色に上気していた。そんな彼女がぼうつとした目で見つめてくるものだから、素子はそういう心配をしたのだった。

「何でもないわ、大丈夫よ」

坊主憎けりや袈裟まで憎しと言う諺を知らないからではないだろうが、ルイズは素子には別に腹を立てる要素は無かった。自分に敵対したりからかったりすることは無いから、キュルケの使い魔とは言え一緒にして憎んだりはしない。そもそも話をしたのさえ今が初めてで、口数が少なく嫌な人物でもないという印象しかルイズにはなかった。

そのままルイズは横を通り過ぎようとしたが、意外にも寡黙と思っていた相手の方から言葉を投げ掛けてきた。

「平賀君のことだが、君が貴人の出だとしても、もっと尊重して扱ってやれないか？」

その人から不愉快な言葉を聞くのは初めてだった。ルイズは、立ち止まると長身の相手を睨み上げた。

「あんたまで私にお説教？　こちらの世界では、貴族と平民の関係なんてそんなものよ」

「キュルケは、私も彼もちゃんと人として、友人として扱ってくれる。彼女だって貴族だが、君とどう違うのか？」

あんまりな相手の言葉に、素子も知らず知らず眉と目尻が吊り上っていた。それを受けたルイズも、よりよってキュルケなんかと比較されて批判され、感情が時化トクの海のように荒ぶり渦巻いていく。「野蛮で気品に欠けるゲルマニア人なんかと一緒にしないで欲しいわね」

素子の頭に血が上った。信頼関係を築きつつある友人を侮辱されては黙ってられない。一見冷静なようで、実は彼女は気が短かったりする。

「野蛮で気品に欠けるのはどっちだ！ この愚か者がっ！」

裂帛の気合が、憩いと寛ぎの空間に響き渡り、幾重にもこだました。生まれついでたの武人である素子の怒気に、空間内の女子全ての注目が集まり、至近距離でそれを受けたルイズは気迫に押し潰されるように尻餅をついた。

「お、愚か者ですって！？ よよよ、よくもこの私に！」

「ふん。己を鏡に映す術も知らぬのか。存外くだらぬ輩、相手にする価値も無いわ」

切れ長の冷めた目で一瞥した素子は、背を向けてキュルケの隣に浸かった。腰が砕けたままのルイズは、自分が情けないのか悔しいのか何やら分からなくなり、頭の混乱が収まるまで立ち上がる事ができなかつた。

風呂上りの上気した美女二人と才人は、部屋で浴場での一件につ

いて語らっていた。

「モトコがそこでバシツと言ってくれたのよ。貴女って、友情に厚いのね」

「当然のことを言ったままで。それにしても、あのルイズという娘、少々思い上がり過ぎるな。あれでは敵ばかり作るぞ」

「あの娘に友達がない理由は、それが主じゃないけどね」

キュルケ達のやり取りを聞きながら、才人は腕組みして考える。

ルイズのコミュニケーションスキルの問題は、自分に対してだけではなかったようだ。冷静で常識人ばい素子にここまで言われるとは、人格に問題があるのは間違いなさそうだと、彼はますます確信を深めた。

「あんなツンツン偉ぶって人を見下して、それでいてツレもないなんて、あいつ何が楽しいんだろ？」

才人の口から、率直な感想がついて出た。嫌な奴だし、まだ顔は見たくないが、聞いていて考える内に、何だか寂しい奴だとも思えてきたのだった。

第五話 宿敵同志

異世界からやってきた平民は、二人とも暴言を吐く無礼者。そういった等を手なづけているキュルケ。自分をさんざ馬鹿にしていながら、いざ困ったことがあれば泣き言ばかり言っている情けないマリコル又。どいつもこいつもムカつく奴ばかり。

その晩、ルイズはろくに眠れなかった。あまりに癩に障ることや屈辱感の量が多過ぎて、気が立って仕方が無かったためだ。脳裏を駆け巡るその日の出来事が、瞼を閉じても意識が落ちることを許さず、日が昇って仕方なく起き出した頃には、鳶色の円らな瞳は充血で赤くなっていた。

だから、翌日の授業中、真面目が取柄の彼女も睡魔には勝てず、うつらうつらして学習機会をほとんどふいにしてしまった。教師に当てられることの無かったのが不幸中の幸いである。

その日最後の授業が終わると、ルイズは断続する意識と視界のまま自室に戻ろうとしていた。

とにかく眠りたい、これだけ眠くなればあっさり寝られるだろう。昨晚不当に奪われた眠りの快樂に、今なら落ちられるという確信と期待をもって、彼女はふらふらしながらも寮への道のりを歩む。

そして、眩しい陽光に痛めつけられながら寮に辿り着き、階段を上がる。残り二段で上り切るところで、彼女は不覚にも意識が数秒途絶え、足元を踏み外してしまった。

「きゃあっ」

重力に背中を引っ張り下ろされる感覚。やばいと思った。痛打を

想像し、反射的に覚悟した。

しかし、背中に受けた感覚はそんな酷いものではなかった。

「おい、大丈夫か？」

腕に抱き止められていた。その相手は、自分と仲違いしたあの使い魔の男である。

「あんた、なんで？」

「なんでって、落っこちそうになってたから受け止めたんだ。女の子が落ちてきて、スルーするわけにもいかんだろうが」

抱き止められたまま、ルイズは相手を見上げた。助かったとは思うが、昨日の件があるので『ありがとう』を言う気にはなれない。使い魔として当然の義務じゃない、と思う。

「偶然とは言え初めて役に立ったわね。部屋に戻るから離してちょうだい」

才人は無然とした。確かに偶然だが、ほっとけば怪我するところを助けてやったのに礼の一つも無しとは。貴族ってのは、下々に何でもやってもらって当たり前前って連中なのか、とまたも不満が燻り始め、率直な思いが口を突いて出ずにはいられなかった。

「ほんっと、可愛くねえよなあ、お前って。なんでそんなんかね、全く」

ルイズは抱き止められたまま、無礼な発言者を睨み上げる。そっちこそなんでム力つくことしか言えないのか、とまたも腹立だしさが再燃してきた。

「あなたに可愛いなんて思われなくて結構よ。さっさと離しなさいよ、助平」

「助平って、お前なあ」

才人は半ば呆れていた。偉そうなのも強情なのも、ここまでくればもうデフォルトとして周囲が認めるしかないのかも知れん。相手にするかどうかは別問題として。

背中を支えたまま階段の一番上まで押し上げてやると、彼はそこで廊下側に向けて、ルイズの薄い背中を軽く押し出した。

「これでもう怪我の心配は無いだろ。じゃあな」

「もうちょよつと優しく押しなさいよね。レディの扱いも知らないなんて、どこの田舎者かしら」

「世界有数の大都市出身だつーの。お前こそ、貴族様なのに人の扱い方も学ばなかったのかよ」

ルイズはかちんときて、そこでさよならすればいいものを、踏み止まって面倒事に自ら突っ込んでしまう。

「ハルケギニアでの貴族の平民に対する扱いは、六千年間ずっとこうよ。あんた達も、こっちに来てしまった以上、早く理解すべきだわ」

「勝手に呼び出しといて、何言いやがる。俺達が望んで来たわけじゃないよ。納得いかないね」

両者は歯を食い縛りながら睨み合った。一度開かれた戦端は、どうにも收拾の糸口が見えてきそうになかった。

「あんた等って、ななな、なんで、なんでそうなのかしら。これじ

「やあ、また苛々して眠れなくなるじゃないの。もういい加減にして欲しいわ」

「険しくても顔立ちだけは依然として可愛らしいルイズだが、そのくりつとした目は赤く充血していた。白い肌と小柄な体、そして愛らしい風貌に反して意外に荒い気性との組み合わせに、才人はある動物を連想する。」

「兎……」

「は？」

「いや、何でもねえ。それより、今日眠そうだったのって、俺達に苛ついて昨日眠れなかったからなのか？」

「そうよ。あんたに始まって、キュルケもモンモランシーも、根性無しのマリコルヌも、最後にはあの黒髪の女も！　なんでこんなにムカつく奴ばかりなのよっ！！」

「急激に感情が昂ぶったように才人には見えた。しかし、ルイズ当人にとっては、昨日から溜まっていた鬱憤がついに決壊したに過ぎない。ここにも、明らかに認識の温度差があった。」

「お、おい、どうしたんだよ、急に」

「ムカつくのよ、もう本当に誰も彼も！　あんた、少しは何とかしなさいよ！」

「やべえ、と才人は勘付いた。」

「寝不足も相まって、ヒステリーとパニックが入り混じった、できれば関わりたくないタイプの女が眼前にいる。こんな可愛い顔して、いや、そういう奴に限って、まさか刃物とか持ち出さないだろうな、と彼は悪考えさせられた。」

「落ち着け、落ち着けて。まずは深呼吸して。あ、水も持ってこようか？」

「いらないわよ！ それよりも、あんた謝りなさいよ！」

駄目だ、話を通じなくなってきた。本当に危ないわ、この女。

才人としては、別に頭を下げる謂われも無いのだが、とりあえず謝っておいた方がいいのでは、と内なる小市民的感性が危機感を告げたため、理不尽を感じながらもしぶしぶ貴族的傲慢性に屈することにした。

「すいませんでした」

「本当に反省してる？ なら、これからは使い魔としてご主人様に忠誠を尽くすのよ。いいわね」

得意げに人差し指を立てるルイズは、それは様になっていた。しかし、ぎりぎりまで妥協して頭を下げた才人に対しては、それは逆効果にしかならなかった。

人が下手に出てりゃあ。調子に乗んなよ、このアマ。

才人の感情のシーソーが、この時青から赤へ傾いた。人間同士の感情の駆け引きは、かくも繊細で移ろい易い。些細な匙加減の違いで。

「俺のご主人様は、優しいキュルケさんだから。優しいご主人様じゃないきゃ、忠誠なんて尽くせませーん」

腕組みしてふんぞり返りながら、才人は拒絶の意思を表明した。

今度は、才人の方がカードを配る番であり、この駆け引きに相手が伸るか反るかを、彼は無意識下にゲーム的に楽しんでいるかも知れなかった。

しかし、どちらにとっても不幸なのは、一方のプレイヤーが駆け引きのイロハも知らぬゴリ押し一辺倒の素人だということだった。

「またその名前を出して馬鹿にしたわね。もう許さない!」

駆け引きどころか、配られたカードを叩き付けて放棄するが如き行為　ルイズは、才人の胸倉を両手で掴んで力いっぱい揺さぶると、その首に飛び付いて自分の脇の下に抱え込み、がっちりロックしてしまった。

「あででで、痛い、痛いつて!　ギブ、ギブ!」

偶然首に少し捻りを入れた形でギロチンチョークを入れられてしまった才人は、力づくで外すことも難しく、反射的にタップして許してもらおうとした。しかし、ギロチンで締め上げられて前傾姿勢になっていたため、背中をタップするつもりだった手は、スカート越しのルイズの尻と太腿の付け根をタッチしてしまう。

「きゃっ、ど、どこ触ってんのよ、馬鹿っ!」

誰にも触られたことのない神聖な場所に、不意討ちのタッチを受けたルイズは、吃驚して背中を反らしながら腰を前に突き出すと、才人の首を抱えたまま体勢が崩れてそのまま尻餅をついてしまう。即ち、ギロチンチョークからのDDTという、女子プロレスラーそのものの技連携が決まってしまった。

「がはっ」

「ぐっ」

頭頂部を廊下に叩き付けられた才人、そして一瞬遅れて仰向けに

転倒して後頭部を打ち付けたルイズは、ダブルノックアウトという形で勝負の幕引きとなった。

次に二人が意識を取り戻したのは夕暮れ時。キュルケの部屋のベツド上であった。ルイズはキュルケの、才人は彼用に昨日から準備してもらったものにそれぞれ寝かせられていた。才人の方が先に目を覚まし、寝不足もあってかルイズの目覚めはそれから暫くの時を要した。

二人とも起きたところで、介抱してもらった手前、キュルケと素子に気絶するまでの顛末を説明する。

「なるほどね。ヴァリエール家の教育科目に格技があるとは知らなかったわ」

「無いわよ!」

「びっくりしたぜ、全く。突然怒り出したただけならまだしも、プロレス技だもんな。お嬢様レスラーとして、レスルエンジェルスに出演できるぞ、マジで」

「悪かったわよ。ちなみに、聞き慣れない言葉が幾つか聞こえたけど、今あんた私のこと馬鹿にしたでしょ」

「腕つぶしが強いつて褒めたんだ」

「全然褒めてないじゃない!」

テーブルを挟んで斜向かいに着席していたため、ルイズの物理攻撃は才人には届かない。こうなることを見越したキュルケが配席を考えたのだ。

「貴女つて、落ち着いて話ができないの? 昨日からずっとそんなじゃない」

「昨日からあんた等がムカつかせるからよ」

隣で諭そうとする落ち着いたキュルケと、腕組みしてぶんすかしているルイズとは、とても同学年とは思えないと素子は思う。容姿も精神性も、成熟度に随分隔たりが見受けられ、キュルケに普段接するのとはかなり異なった遇し方が必要だろうと彼女は判断する。

「昨日の件については、私も君に言い過ぎたと思う。済まなかった」

素子は座ったまま、仰角四十五度に頭を下げた。一連の所作には澱みが無く、定規で測ったようにきっちりとした美しいポーズで、苛立ちを隠せないルイズさえ関心を引かれ、幾分落ち着きを取り戻せた。

「まあ、分かればいいのよ。今後は気を付けてくれれば」

「そうだな、気を付けよう。しかし、君の暴言もまた褒められたものではなかったな」

凪ぎ始めた心の水面に、大きな石が投げ込まれた。ルイズの視線に、また先の険が宿る。

「私も自分の非を認めた。だから、君も同じように認め、侮辱した相手に謝ってほしい。それをもってここまでの軋轢を水に流し、普通に会話できるのだと思う」

うつと呻くルイズは渋い顔になっていた。わがままを言う子供のようだな、と素子は心中苦笑する。

「平賀君」

素子は囁くような声と共に、隣人を軽く肘で突いた。彼は全くの馬鹿でもないので、これくらい文脈は読み違えることはなかったし、少しは謝られた上皮肉も言えたので、気持ちは結構すっきりしていた。

「あのさ、俺もお前に気分悪いこととか言つてごめんな」

日照の少ない沼のような雰囲気のルイズだったが、雲間から一条の光を浴びた程度の明度を回復したように、素子達には見えた。そのまま無言で待ち続けていると、ついにルイズは重い口を開いた。

「何よ、これじゃ私だけ悪者みたいじゃない。分かったわよ。えつと、サイトにはかつとなつて乱暴してごめんなさい。それと、キュルケには昨日は言い過ぎました。ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げると、目を瞑つてぷいとそっぽを向いた。見届けた三人には薄らと笑顔が漂い始める。

「ほんつと、お前つてかわいくね、もがっ」

「まあ、なんだ。我々としても、君との間に壁を作りたくはないんだ。奇縁ではあるが、未曾有の事態に遭遇した同志として、互いに協力してやっていきたいと思つている」

つい軽やかになる才人の口を、素子が寸前で塞ぎ、ようやく正常に流れ出そうとしている場を繋ごうと努めた。

「あんた達とはともかく、キュルケと同志だなんて」

「過去の経緯は聞いている。代々の宿敵同士、心中穏やかではなからう。しかし、私達は未曾有の事態に巻き込まれたんだ。今後、前例の無い困難にもきつと遭うことだろう。私達のいた世界には呉越

同舟と言う故事があつてだな」

またも洩るルイズに、素子は古代中国の話を持ち出す。

呉と越は仇敵同士だが、仮に呉人と越人が同じ舟に乗り合わせ川を渡る場合、強風で今にも舟が転覆しそうになれば、呉人も越人も普段の敵対心を忘れ、互いに助け合つて危機を乗り越えようとする。

ルイズは視線を少し落として、真剣な目をして押し黙った。

彼女の言うことは、きつと道理に適つている。それは分からなくもない。しかし、それだけでは割り切れない、数千年来の血塗られた歴史があるのだ。ご先祖様のことを思うと、容易く理に屈することもできないのだ。

何分もそうして決断できないでいるルイズだったが、するともう一方の人物が手を差し出してきた。

「ルイズ、貴女の気持ちは分かるわ。私も同じ立場だもの。だけど」
キュルケの言葉の続きは、ルイズが突き出した小さな掌に阻まれた。

「その先は私に言わせて。学院内でのことについては……一時共闘……するわよ」

白い手と、一回り大きな褐色の手が握り合った。

「よろしく」

爽やかに笑うと、キュルケはぐっと力を入れて握り込んだ。痛み

に顔を顰めながら、ルイズはすぐさま前腕部に力を込めて応戦する。

「こちらこそ」

こいつには負けたくない。表情を見れば雄弁な二人の腕が震え出し、それは全身まで伝わる。学院の双壁を為す美少女二人のこめかみには、麗しくない青筋まで浮かんでいた。

「まあまあ、二人とも。カビベはそれくらいにして、もっと楽しい遊びでもしようぜ。ほら、ルイズも見てみ」

二人を宥めながら、才人はノートパソコンを取り出して机の上に置き。電源を入れた。

第六話 一番不運な彼

「きゃーっ、蟹速いつ、速過ぎっ！」

「おい、急にコントローラー渡す、あっ」

「はい、これで私の二十連勝ね」

力強い握手を交わした日から、ルイズの部屋を溜まり場に4人は放課後を過ごすようになった。パソコンにインストールしてあったレトロゲームに、キュルケとルイズがはまってしまったのだ。ちなみにこの時は、『マリオブラザーズ』の二人プレイだったが、手先が不器用なルイズはキュルケにどうしても勝てなかったのだ。

このゲームをやり始めた頃は、二人で協力プレイもしていたが、イージーミスを繰り返すルイズとの共闘が面倒臭くなった気まぐれキュルケが、POWを悪用してルイズがキックする寸前の敵を蘇らせたり、ファイヤーボールに後ろから押し込んで死なせたりと妨害プレイを始めたため、同作品の真の顔と言うべき『殺し合い』が始まってしまったのだ。

腕前で劣る上にカツとなり易い性質のルイズは、キュルケの姦計にはめられまくり、同じことをやり返そうとしても、逆に敵を引き付けたところでジャンプ回避されて自爆など、散々であった。たまにキュルケを仕留めることはあっても、結局先にゲームオーバーになるのは常にルイズであり、彼女にとってはかなりのストレスゲーとなっていた。

「もう！ こんなのがやってられないわ！」

「ああっーっ！！ コントローラー投げ付けるなー！！」

自棄になって別売りコントローラーを床に叩き付ける敗者に、持ち主は慌てて抗議する。

「馬鹿！ 壊れたらこつちじゃ二度と手に入らないんだぞ！」

「何よ！ あんた、ご主人様の気持ちよりこのゲームの方が大事だと言っの！？」

「逆切れして居直んな！ 次やったら触らせないからな！」

「だって、だって、悔しいんだもん。マリオだけじゃなくて、『アイスクライマー』も『バルーンファイト』もキュルケにやられてばかりだし、『ギャラガ』も『ゼビウス』も一度も勝てないし！」

ルイズの大きな目が潤んでいるのを見た才人は、それ以上言いにくくなつてしまった。

ここまでの数日間、幾つかのアクションゲームを合わせて数百回対戦した結果、キュルケが全勝という何とも悲惨な結果に終わっている。手動ハンドルによる充電器をひたすら回しながら、その一部始終を見守っていた彼から見ても、あまりに一方的で悲惨であり、気の短い彼女にしてはここまで良く我慢したと言つてもいいくらいである。再入手不可の機械に八つ当たりさえしなければ。

「ルイズ。悔しい気持ちは分からんでもないが、心が乱れると勝てる勝負も勝てないぞ」

「心乱れてなくても、一度も勝てなかったもん。サイト、他のゲームは無いの？ 私が勝てそうなやつ」

くさくさしているルイズは、素子の慰めにもろくに耳を貸さず、ゲームの持ち主でもある使い魔に当然のように要求する。彼も、ルイズが勝てそうな作品を考えてみるが、ここまでの全てを見た結果、『対戦でルイズがキュルケに勝てそうなゲームは入ってない』という判断をせざるを得なかった。

現代っ子から見れば、キュルケもまだ拙いところはあるが、コントローラーを握って十数時間の身としては、悪くないレベルだと彼

は思う。マリオ等の殺し合いなんて、彼でも油断すれば足元をすくわれかねないくらいに。それに比べると、ルイズが結構ぶきつちよだということが、プレイを見て判明したのだ。

インストールされている対戦可能なゲームはほとんどアクションゲームばかりであり、ルイズの勝機はほとんど皆無。非アクションの対戦ゲームとしては、光栄の歴史シミュレーションも入っているが、これは漢字とかなを覚えなくては覚束ないため、相当勉強しないと対戦など無理と思われた。

「ごめんな。対戦できるのアクションばっかだわ。一人プレイなら、RPGとかシミュレーションRPGとかもあるんだけど」

「もついいわ。疲れたから、モトコに向こうの世界のお話でもしてもらっわ。あんたは、食堂に行つてデザートでも取つてきて」

第一の要望が通らなかつたため、ルイズの鋭気が挫けたように見えた。同情を覚えた才人は、せめてものことができることをしてやろうと思ひ腰を上げた。

使用人に言えばデザートがもらえると聞いた才人は、食堂に入つて周囲を見回した。向こうにメイドがいるのを見掛けたので、そこに向かつて歩いていくと、途中のテーブルに座っている金髪の少年のポケットから何かが転げ落ちるのが見えた。ごく標準的な日本人である才人は、ごく標準的な日本人としての行動をとる。

「これ、落ちてたよ」

床から拾い上げた小瓶には、紫色の液体が入っていた。端正な顔立ちに薔薇を啜えた少年は、それを受け取るかと思いきや、すつと掌を向けて拒絶の意思を表した。

「それは僕のじゃない。勘違いしたようだね」

何言ってるの、この人？ 結構天然入ってるのか？

才人は、予想外の返答にどう対応してよいものか悩んでしまう。故意なのか、それとも本当に気付いていないのか。もう一度確かめてみることにした。

「いや、だって、あんたのポケットから今落ちて……」

「だから、君の勘違いだよ。くだいな、もう」

才人は、彼の意図が何であるか確信は持てなかったものの、ここまで拒絶されては無理強いしにくいと思った。だから、最後に一つ試して終わりにしようと思った。

「そうか。じゃあ、他の持ち主を探すとするよ。邪魔したな」

少年のすました表情に、硬直が生じるのを才人は見逃さなかった。やはり、故意で知らん振りを通そうとしているんじゃないのか。といっても、それ以上才人は押し問答を続けるつもりも無かったので、横を通り過ぎようとした。

「ま、待ちたまえ」

何だよと言外に伝える面倒臭そうな表情で、才人は振り向いた。もうこの男に興味は無かったのだ。

「その持ち主の心当たりがあるんだ。僕に預けてくれれば、ちゃんと返しておくから」

どうも胡散臭い。相手の表情にも声調にも焦りがちらほらと見え

る。でも、才人にはもうどうでもいいことだったので、返してやってもいいと思った。

「そうか。じゃあ、返しといてね」

あっさりと手渡すと、少年は安堵の溜息を漏らした。しかし、間髪入れずに隣の友人が、その香水について重要なコメントを発したことで、未然に鎮火したはずの火種が燃え上がるきっかけとなってしまう。

「その香水の色、モンモランシーのじゃないか。ギーシュはモンモランシーと付き合っていたのか、なるほど」

ギーシュと呼ばれた少年の表情が、一瞬でぎこちなくなる。平静を取り繕うのが下手だな、と才人は少々呆れながらその場を立ち去ろうとした。

「ギーシュ様」

その直前、誰も気付かない内に、一人の少女がギーシュの近くに来ていた。栗毛色の可愛い娘は、目に溜めた涙がもう溢れ出ていた。

「ミス・モンモランシーと付き合ってたのね」

「違うんだ、ケティ。いいかい、誤解の無いように言っが……」

冷や汗をかいて狼狽するギーシュの弁解は、最後まで発言することを許されなかった。

「ムグオツ！」

「さようなら！」

テーブルの上に置いてあったクリームパイ1ホールを皿ごと、ギーシュの顔にキスを見舞ってケティは走り去った。才人も友人達も啞然として言葉を奪われたが、当のギーシュは間も無くハンカチを取り出して、いそいそと顔を拭い始めた。

「彼女はどうかやら誤解してしまったようだね。仕方が無いな」

こいつ、馬鹿なのか大物なのかどっちなのか。真っ白な顔を見た才人は、動画サイトで見たドリフのコントを思い出して、思わずうぷぷと吹き出しそうになってしまう。

「こら、君、平民のくせに貴族を笑うとは失礼だろう」

「だ、だってさ、高木ブーみたいのが現実にあるなんてさ。はー、動画サイトにうPしてえよ、可能なら」

無遠慮な発言に、ギーシュはじろりとねめつける。しかし、それはほんの数秒間しか許されなかった。

「やっぱりあの娘と付き合ってたのね」

半分以上クリームを拭き取ったギーシュの顔が青褪めた瞬間を、才人は見た。被告人の後ろには、金髪縦巻きロールの美少女が、本来白い肌を林檎のように染めて仁王立ちしていたのだ。

「モ、モンモランシ……」

「私が貴方のためだけに、特別に調合した香水。気に入らなかつたみたいわね」

歯車の錆びた人形のように、ギーシュはぎこちなく首を声のする方に向けた。

「いらぬなら、そうはつきり言ってくれば良かったのに。気を遣う必要なんて無いんだから」

「ち、違つんだ、誤解だ。聞いておくれよ」

体ごと向き直つてガタガタ震えるギーシュ。モンモランシーは、テーブルの上のワイン瓶を手に取ると、振り上げて彼の脳天に叩き付けた。

「最低！ 大嫌い！！」

食堂内の全ての者の視線が、そこに集中していた。肩を怒らせて早足で去つて行つたモンモランシーの一撃は、才人も貴族の友人達もを震え上がらせてその場に縛り付けてしまった。爆心地のギーシュは、両手で患部を押さえてテーブルに蹲っている。中身が白ワインだったため分かつたのだが、出血は無かつたようだ。瓶は見事に砕け散つたにも関わらず、なかなかの石頭である。

「こ、こえゝ。可愛い顔して、瓶で思いつきし頭ぶつ叩くかよ。ルイズと同等以上の凶暴さだな」

辛うじて最初に声を絞り出したのは、本来無関係のはずの才人だった。うおおと呻いて頭を押さえるギーシュに、最初に声を掛けたのも彼である。

「おい、あんた大丈夫か」

「あ、あ、愛が痛い」

一応本気で心配したのに、と才人は力が抜けた。こいつ、元々ネジ何本か緩んでるんでないか、とさえ考えてしまう。

「大丈夫そうだな。じゃあ、俺行くから」
「待ちたまえ」

またかよ、と才人はうんざりする。体を張ったギーシユのコントは凄かったが、それが終わった今、介抱の必要も無いなら、早く部屋にデザートを持って帰らなくてはならないのだ。こんな二枚目半にかかずらわっているのは、彼のお嬢様がまた臍を曲げるかも知れない。

「何だよ」

「君が僕の意図を読めなかったばかりに、こんな事態になってしまった。彼女達は傷付き、僕は頭を瓶で殴られた。どうしてくれるんだい」

「はあ？ 才人は、相手の言っていることがすぐに理解できないでいた。」

こっちは親切で拾って、認められないから持って行くことしたのを、呼び止めまでして結局受け取ったのは自分自身じゃないか。そもそも、可愛い女の子に二股掛けていたのが悪いのであって、全て自分のせいにされるのはどう考えてもおかしい。

「誰もどうもしねえよ。自業自得だろうが」
「君が一度目で瓶を引っ込めていれば、こうはならなかった。違うかい？」

違うに決まってるだろうが。才人は、少しずつ苛つき始めていた。何だ、こいつ。自分の浮気がばれたのを、俺のせいにするつもり

かよ。頭の中、万年七夕なんじゃねえのか。髪の毛が五色の短冊でさ。キザだしうざいし、面倒臭い野郎だ。

「あのさ、自分が二股掛けてたから悪いって考え方にならないわけ？」

「それと君の過失とは別さ。だから、謝るんだ。今なら許してあげよう」

何を偉そうに、こいつは。盗人猛々しいってこのことだ、と才人は半ば呆れてしまう。あんまりしつこいもんだから、もう適当にうつちゃってこいつから離れたいと彼は思った。だから、ワガママなご主人様を相手に学んだノウハウをちょっとだけ活かそうとしてみた。

「はいはい、私が悪うございましたよ。気が回らなくてすみませんでした」

ぶつきらぼうに言って頭を下げると、才人はさつさと脇を通り抜けようとす。しかし、こここの関所の役人はまだまだしぶとかった、

「何だい、それは！？ 心が籠ってないじゃないか。やり直した」

才人はちつと舌打ちする。ああ、もううざいな、こいつは。高校の体育教師みたいに、男のくせにねちねちと嫌味ったらしい奴め。言い掛かりも大概にしるよ。

段々苛々が募ってきた才人は、振り向くとテーブルの上にある別のワインを視界に捕らえた。

超が付くほど可愛いけどワガママで短気なおせうさまの相手に一生懸命の俺が、何でこんな悠々自適でリア充のイケメンに言い掛か

りつけられて、何回も駄目出し食らいながら謝らなきゃなんないんだよ。お前等、どうせ上等なワインを楽しんでるんだろ。俺にもよこせ。

何かの拍子にたがが外れたか、才人の不満が膨れ上がると、彼は瓶を奪い取り、ラツパ飲みした。

「お、おい、こら、人のワインを勝手に飲むな」

ギーシュの非難を聞き終える頃には、才人は瓶一本丸々空けてしまっていた。急激に血中のアルコール濃度が上昇した彼の目は、常ならぬ据わり方をしていた。

「てめ、さつきからうつさいんじゃ、ボケー！」

「な、何だと、無礼な！」

急に乱暴になった言葉遣いに、ギーシュは血気走りそうになった。しかし、それより早く、才人が彼の肩にマブダチの如く腕を回していた。

「俺やあなあ、生まれてこの方、女の子にもてたことなんてねんだよ。年齢〓彼女いない歴だ。分かるか！ おい、イケメン！」

酔っ払いに力任せに肩を揺すられたギーシュは、生まれて初めて遭遇する人種に目をぱちくりさせて黙ってしまふ。

「おめえみたいに可愛い娘を二股するようなりア充にはなあ、説教されたくないんだよ、ああ~~~~ん!?」

今度は自分が面倒臭い相手を抱え込むことになったギーシュは、未体験の雰囲気飲まれてしまい、八つ当たりしたい気持ちも萎え

てしまった。今はまず、上手いこと酒乱男を追い払い、平穩を取り戻そうと考えた。

「ん、何だその、悪かった。もう行っていいぞ」

「おう、じゃあな。これに懲りて二度と調子こくんじゃね、うぼっ」

それで何とかなるはずだった。ギーシュはそう思っていたのだが、酔っ払い才人は、立ち上がったところで口を押さえて、やや前かがみになる。

「おい、どうした？」

「げぼあっ」

着席しているギーシュは、頭上を突如襲った土石流をかわす術を持たなかった。

第七話 さようなら さようなら 好きになった人

それは、意外なほどに濁りが少なく、きらきらと反射さえして降ってきた。彼の胃が空に近かったせいもあるのだろう。だからと言って、被害者の気持ちが始まるかと言うと別の話だが。

「うわっ！ 酸っぱう！」

ギーシュの整った目・鼻・口にも、リバーズした白ワインが入ってしまい、彼はたまらず顔を手で覆った。そして、友人から借りたハンカチで顔を拭いながら、当然の非難をする。

「何てことをするんだ！ 貴族に平民がゲロを掛けるなんて、ただでは済まないぞ！」

「ういー、ひつく。う、ごめん。今のは悪かった」

まだ酩酊気味ながらも、吐いたことで少しずつ酔いが醒めつつある才人は、流石に悪いと思い頭を下げる。しかし、ギーシュの気はその程度では済まない。

「形だけ謝って許してもらえと思うのかい。頭を洗って着替えてくるから、少し待っていたまえ。君達、彼を見張っていてくれ」

そう言い残して早足で退室するギーシュを見送っている内に、才人は友人の貴族二人に挟まれてしまった。一対二じゃ振り切る自信無いな、と判断した彼は、交渉してみることにする。

「なあ、俺って元々ご主人様の部屋にデザート運ぶために来たんだけど。変な成り行きで遅れてしまったけど、そろそろ戻らないとや

ばいんだわ。一旦解放してくんないかな？」

真実を告げて酌量してもらえないか、と才人は望みを賭ける。しかし、友人達は首を横に振って拒絶する。

「貴族に無礼を働いたんだ。何のお咎めも無く解放はできないよ」
「ギーシュが戻るまで大人しく待つんだな」

え、と不満の声を上げる才人を、彼等はそれ以上相手にもせず
にいた。何をされるのかという不安が三割、ルイズがまた臍を曲げ
ることを想像して気が重くなるのが七割の才人は、酔いの残滓と憂
鬱な気分で段々気持ち悪くなっていく。十五分ばかりして、着替え
ていい匂いのするギーシュが戻ってきた。

「ここでは何だし、場所を変えるぞ」
「おえつぶ。吐きそうだから、吐き易い場所に連れてって」
「ああもう、汚いなあ。先にトイレに行ってきたまえ」

監視付きのトイレでひとつ吐き済ますと、才人は連行されていっ
た。

噴水のある広場で、才人はギーシュと向かい合っている。後方を
彼の友人二人に塞がれ、逃げることはほぼ不可能な状態である。

「さて、君によってこうむった被害の報いを受けてもらうわけだが、
本来なら拷問・投獄されても已む無いところだ。平民が貴族に対し
てやらかしたのだからね」

物騒な言葉に、才人は縮み上がりそうになるのを懸命に堪える。拷問？ 投獄？ あの程度で、何でそんなことになるの？ この世界は、切り捨て御免がまかり通るってのかよ。

「だが、僕は寛容で慈悲深いのでね。大まけにまけてあげようと思う。とても痛いパンチ一発と、少し痛いパンチ五発。どちらかで勘弁してあげよう。選びたまえ」

最初の言葉で動揺していた才人は、ギーシュの話術に絡め取られるほかなかった。

Aという要求を呑ませるために、Aよりハードルの高い要求Bを最初に突き付け、当然拒否されたところで、妥協する振りをしてAを提示し呑ませる。交渉事の基本テクニクの一つであるが、この場合も、最初に拷問・投獄というベリーハードな条件を突き付けられていたので、才人にとってはパンチ数発で済むのはとても助かるという気分になってしまったのだ。

ありがたい。こいつがどんなパンチ持ってるか知らんが、拷問・投獄よりは絶対マシ。是非ともそっちにしてみらおう。とても痛いパンチ一発と、少し痛いパンチ五発って格ゲーで言えば、強パンチ一発と弱パンチ五発だよな。弱の方がマシな気がする。

「弱、じゃなくて少し痛いパンチ五発で頼みます」
「いいだろう」

あっさり応じると、ギーシュは胸ポケットに差していた薔薇を手に取り、軽く何度か振った。彼の両手が光ったかと思うと、それは鈍色の金属製の籠手を纏っていた。

「へ？」
「では行くぞ」

片手で才人の肩を鷲掴みにすると、ギーシュはもう一方の手で拳を作り、才人の腹に叩き込んだ。

「ぶおっ！」

砲丸握って腹に叩き付けられた、そんな感じである。重痛い。空気が乱暴に咽喉の奥から吐き出される。

「あと四発！」

ちよつと待って、どこが少し痛いパンチだ！？ 不服を訴えようとした才人が言葉を紡ぐ前に、残りの重弾が立て続けに打ち込まれた。

「じっ！ あっ！ がっ！」

一発ごとに内臓ごと宙に持ち上げられるような感覚。体をくの字に曲げさせられながら、為す術無く連打される才人は、打ち込まれる度に酸っぱいものを吐き出させられる。

「これで最後だ！」
「ぼふぁっ！」

念入りな最後の一発は、よりによって鳩尾に炸裂した。呼吸困難に陥った才人は、ひゅーっと風切り音を吐きながら、石畳に崩れ落ちる。

酷えっ。これで少し痛いなら、凄く痛いってどんなんだ！？ 背

骨までへし折れるつてのか!? なら、やっぱりこれで正解だったのか?

「この程度で済んだことを幸運に思いたまえ」

ひゅーひゅーと喘ぐ才人を一瞥すると、ギーシュはガントレットを解除する。ふと視線を上げたその先には、先程自分を瓶でかち殴った愛しの君が歩くのが見えた。寂しさと空しさが入り混じった視線を送っていると、先方がふと彼の方を向いたので目が合う。しかし、ギーシュだと視認すると、彼女は険しい目付きになりすぐに眼を逸らした。

「モンモランシ……」

ギーシュは悲しくて意気消沈してしまう。気分に合わせて下を向くと、自分が制裁した平民が、変わらずひゅーひゅー喘いでいる。

こいつさえいなければ　ギーシュの中からやり場の無い悲憤が溢れ出た。

「畜生、畜生め!」

腹を抱えて丸まっている才人に、ギーシュは情け容赦無いサツカーボールキックを連発する。

「やべつ、やべて……」

「なんでっ、なんで、あの時あの場所へ来たんだっ! くそっ、くそっ!」

ゲシゲシと蹴られる才人は、話が違つたと抗議したかったが、声も

まともに出せない状態なので、ただ不当な暴行に甘んじるほかなかった。青山さん、キュルケ、ルイズでもいいから誰か助けてくれ、と都合良く仲間が助けに来るのを待ち望みながら。

しかし、彼を救ったのは、予想外の存在であった。

地べたで亀になつて耐える才人は、背中に重い何かを押し掛かるのを感じた。ギーシュが踏み付けたのかとも思ったが、それともまた違つとすぐに考え直す。背中全体に押し掛かる感触であり、それも足が複数本あるような感じだ。

ギーシュの蹴りが止んだので、才人は恐る恐る上体を起してみる。それに合わせて彼から下りる足が見えた。黄色っぽい短い足が何本も。

「君は、確かモンモランシの」

ギーシュが知らないはずはなかった。モンモランシの使い魔である烏賊の魔物、確かプチと呼ばれていた。

ポーカーフェイスながらどこか笑っているような表情のプチは、十本の足を左右にふわりふわりとスイングする。才人には、それがフラダンスのようにも見えた。

すると、不思議なことに、それを見た少年達の中に、それぞれ説明できない情動・躍動感が湧き起こった。体がうずうずしてじつとしてられない、その結果は十人十色であった。

「お、およ、とっ、どうした」

「わ、わ、わ、どうして、どうして」

ギーシュの友人二人は、それぞれコサックダンスとバンブーダン

スっぱい動きを始めた。本人達は、何が起こっているのか分からない、と雄弁に表情でも語っている。

才人も、共通の感覚を体験していた。彼等と違うのは、体を動かしたいという、思考よりもっと深い場所からの欲求にも関わらず、呼吸が辛くて立ち上がりもできない故に、地べたに横たわり続けることが許されている点である。

そして、残りの一人もまた同様であった。

「こ、この感じは何だ？ う、うおお、この情熱的リズム、た、堪らない」

自分を抱き締めるようにして身を擦るギーシュを、才人は当然のように気持ち悪いとしか思えなかった。本人はこれで真剣なのだが。

「プチー、勝手に遠くに行っちゃだめよー」

プチのご主人様が、呼び掛けながら近付いてきた。その姿が視界に入ると、ギーシュの情動は狂おしいほどに猛り、彼の意識以外を支配した。自分が自分で無くなる瞬間を、彼は悟ってしまった。

「だ、駄目だ、モンモランシ！ こっちに來てはならない！ うわあ！」

ギーシュは腰から走って行った。才人の目には、そう映った。そして、あるうことか、ギーシュは自分の両足でモンモランシの片足を挟むようにし、彼女の肩と腰に腕を回して踊り出した。

「きゃあああーっ！！ ちょ、ちょっと、ギーシュ！ 体をくっ付け過ぎよ！ 離れなさい！」

「そ、それが、体が言うことを聞かないんだよ！ 腰がつ、腰が動いて！」

ギーシュは彼女に密着したまま腰をくねらして踊る。くねらす度に、モンモランシの細くも柔らかい足に股間が擦れて、青少年としては健全だが、情けないくらいに元気になっていく。

「！ やだっ！ 何よこれっ！？ 離れてっ！ 離れなさいよっ！ 汚らわしい！」

「ああ、ごめん。ごめんよお。僕を刺してくれてもいいよ……」

愛しい少女に密着して、その匂いと柔らかさを存分に味わいながら、服越しとはいえ性器まで擦り付ける。貴族としてはどうしようもなく卑猥であり、恋人でもない相手に極めて恥ずべき行為ではあるが、ギーシュは己を恥じモンモランシに心から詫びながらも、その心身両方における快樂に吞まれゆく。逃れようにも、体が快樂以外の何らかの理由で言うことを聞かないのだ。

「うあっ！ やばいつ、やばいよ！ 離れなきゃ、もう」

快樂にばかり溺れてもいられない事態に、局面が動いた。心地良過ぎて“出そう”なのである。

好きな相手に密着して擦り付ける。それは、自分で擦るのとは比べ物にならない幸福感・充実感である。

しかしそれでも、貴族どころか男として超えてはならない一線がある。いくらなんでも、好きな娘に擦り付けて発射してしまったら、もう生きてはいけない。彼女ばかりか女子全員が、今後一切相手にしてくれないだろう。名門グラモンの家名も汚すことになる。それだけは死んでも嫌だ！

「た、助けて、モンモランシ！！」
「馬鹿あつ　　！！！」

悲鳴とも怒号ともつかぬモンモランシの絶叫。その瞬間、彼は昇天寸前から地の底まで突き落とされる。

「あ……あがつ……」

自分の太腿に押し当てられた不浄のブツを、彼女はそのまま蹴り上げたのだ。蛮行が止み股間を押さえて蹲るギーシュに対し、動揺した呼吸を何とか整えながら、モンモランシは魔法を詠唱した。

「ぶわっ！」

モンモランシの突き出した杖から発生した水流が、ギーシュを噴水の中へと吹き飛ばした。

「貴方なんて貴族の資格も無いわ！！　二度と私の前に姿を見せないで！！！」

目尻に涙の粒を寄せ、顔を真っ赤にして怒声を張り上げると、モンモランシは忌々しい場所から足早に去って行った。

まだ踊り止まない二人の貴族を尻目に、横たわったままの才人はぽつり呟いた。

「ランバダ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3984t/>

使い魔さま ご主人さま

2011年5月26日16時45分発行